

第七回 平成二十二年十一月二十日



村上春樹の世界 ―声と音楽と映像による逍遙―

平川 大作

二〇一〇年十月七日、ペルーの小説家マリオ・バルガス・リョサにノーベル文学賞が授与された。その発表の直前まで、日本のマスコミがイギリスの著名ブックメーカーにおけるオッズ上昇などを取り上げ、村上春樹の受賞に寄せられる期待を報じたことは記憶に新しい。実際、川端康成と大江健三郎に続き、日本人作家としてノーベル文学賞に最も近い位置に村上春樹がいることは、その賛否はおくにしても、衆目の一致するところだと言えそうだ。

その根拠は、彼の著作が同時代的な「世界文学」として各国語において読まれていることにある。「世界文学」とは、限定的な文化／言語的な枠組みを離れてもなお、人類が共有可能な問題を取り扱い、表現している文学作品のことだ。

村上春樹の作品は「世界文学」である。海外の読者は村上の小説を「文化的他者」ではなく、もっと身近な存在として受け止めているのであって、日本という異文化を理解する一つのツールとして読んでいる

わけではない。そうした目的に合致する作家であれば、村上春樹より相応しい名前を何人も挙げることが可能だろう。ただし、「日本を描いている」という一点において最も高い価値を認めうる場合、その小説はあくまでひとつの「ローカル文学」に留まることになる。

実際、過半の文学作品は固有の言語によって、その土地や文化圏固有の事柄を描く「ローカル文学」である。無論、「ローカル文学」であることは文学の必要条件であり、決して「世界文学」という概念に比して下位におかれる価値ではない。よって、村上春樹とその作品を彼が生まれ育ったという阪神間、芦屋という土地にどこまでも結びつけて考えることは、文学研究という観点からも、文化的無形財産の地元への還元という観点からも、今後ますます押し進められるべきだろう。

一方で、例えば小説に描かれた場面や特定の細部の源泉が具体的にどこに所在しているのか、という注釈は、作品をよりローカルな価値観に結びつけて読解するにあたっては有効な情報となるが、前述したような「世界文学としての村上春樹」を可能にしているのは、そうした注釈の集積ではなく、より根本的な小説としての主題、構成、手法、言語表現、想像力であることは疑いえない。公開講座の第四章「村上春樹の世界―声と音楽と映像による逍遙―」では、あえて村上春樹における「地方性Ⅱローカリティー」ではなく、その「世界文学」としての側面に着目した。

十一月二十日に催した第一回は、村上春樹作品を理解するための導入部として、『海辺のカフカ』から冒頭部分の抜粋朗読、および映画化された初期作品の紹介を中心に構成した。第二回では『海辺のカフカ』を重点的に取り上げて議論することを参加者に予告した上で、それまでにぜひ上下巻の長編小説を「読了」してもらいたい旨、告知した。

抜粋の朗読には、『海辺のカフカ』講読の刺激剤とするだけでなく、村上春樹の文体が持つリズムを黙読ではなく、耳で感覚的に味わうという狙いがあった。果たして、彼の文体のリズムがどこまで翻訳可能なものであるのかどうか、村上の作品が「世界文学」として受容されるにあたって、その文体がどこまでの意義を果たしたのかを明確に位置づけるためには、精緻な研究が必要とされるだろう。残念ながら、この公開講座の目的はそうした研究による実証ではない。文体を吟味するつもりで実際に声に出せば、それが音楽的かどうかは判然とする。日本語が分かるとは、そういうことなのだから。

村上春樹が作中で頻繁にロックやジャズなどのポピュラー音楽やクラシックに言及するだけでなく、それらを物語上の重要な主題と不可分な要素としていることはよく知られている（この点については、本稿で小林宣之が詳しく述べている）。その一事のみにおいても、村上春樹の作品が「音楽的」であることは論を待たないが、その音楽性が呼吸の感覚を大切にした文体というかたちで作品の隅々にいきわたっていることを指摘しておきたい。日本語の生理的なリズムを巧みに活用した結果、村上春樹の諸作品は読者に

とって「リーダブル」な魅力を有している。ときに村上の繰り出す比喩や表現、物語の展開は難解と思われることがあるが、決して文体は難解、難渋には陥らない。そこに心地よい、村上春樹ならではのリズムが横溢しているからである。公開講座では、在学生の井上唯香、藤川由翔、岸田功平の協力を得て、登場人物および地の文を複数の読み手に割り振って朗読を試みた。この学生諸君による朗読は、講座の参加者に好意をもって受け止められたことをここに記しておきたい。

この「朗読による音楽性」は、村上春樹の作品を映像化したいいくつかの作品においても、主に「小説の朗読＝主人公の語り」として取り込まれていることが確認できる。講座では以下に掲げる作品を部分的に鑑賞して、村上春樹作品に通底するリズム、テンポを検証した。

- ・映画『ノルウェーの森』予告編（二〇一〇年） <http://www.norway-mori.com/top.html>
- ・映画『風の歌を聴け』（一九八二年）監督：大森一樹 主演：小林薫
- ・映画『パン屋襲撃』（一九八二年）監督：山川直人 主演：趙方豪
- ・映画『100%の女の子』（一九八三年）監督：山川直人 出演：室井滋

一九八〇年代初めの三作品ではいずれも若き日の室井滋が登場して、主人公がつきあった相手等、重要

な女性像を演じており印象的だった。作品の根幹をなす主人公の語りは、抑揚を抑えたフラットな、物語の語り手にふさわしい幾分超然とした調子を感じられるものであり、たとえば関西の言葉など、土着性・地方性を強調したリズムやテンポではなかった。

実際に声に出し、あるいは記録された声に耳を傾け、そこで感得できたものを正確に言葉にするのは難しい。しかし、その難しさは村上春樹の文体に認められる独特のリズムと調子を言語表現に置き換えるときの困難さであって、理解することの難しさではない。その「体感」を基礎にして、次回『海辺のカフカ』を精読、分析して論じることが予告して、一回目の講座は終了した。